

3 自己点検評価の結果

(1) 評価結果の概要

中期計画実現のために、平成16年度に設定された個別研究・事業件数は、業務運営の効率化が1件、東京文化財研究所が75件、奈良文化財研究所が55件、あわせて131件である。

これまで通り、東京文化財研究所部会、奈良文化財研究所部会に分かれて、これらの個々の研究・事業項目別に自己点検評価を行った。その上で外部評価委員に対して、研究・事業責任者から研究・事業内容の説明、自己点検評価の根拠となる観点と基準の説明を行い、自己評価の適否についての意見を求め、それらの意見を参考にしつつ本評価をまとめた。以下、自己点検評価および外部評価委員による評価の概要をまとめる。

【自己点検評価】

1. 自己点検評価においては、各研究・事業とも、全体的には、年度計画予算に対して順調に進行し、予算が適切かつ効率的に執行されていることが確認できた。
2. 自己点検評価の作業を進めるに当たって、これまで各研究所部会の他に、両研究所の委員総会を開催して全体の取りまとめを行っていたが、昨年度までで一定の流れもできたことから、業務の省力化とコスト削減のために、今年度はこれを改め、正副委員長と事務系部長などからなる代表者会議をつくって、全体のとりまとめに当たることとした。なお今回から委員長には田辺征夫(奈文研埋蔵文化財センター長(現、奈良文化財研究所長))に代わって三浦定俊(東文研協力調整官)、副委員長には毛利光俊彦(奈文研埋蔵文化財センター長)と中野照男(東文研美術部長)が就任した。

【外部評価委員による主な評価】

今年度の点検結果を次期中期計画に生かしていくことになるので、外部評価委員からはそのような視点からの意見が多かった。

1. 外部評価委員からの全体的評価は、研究・事業目標および研究・事業内容については、基本的に妥当であり、年度計画における実施状況も順調かつ適切である、との評価を得た。
2. キトラ古墳・高松塚古墳の調査保存や西アジアへの保存修復協力事業など、東京と奈良が一体となって進めている事業について良い評価をいただいているが、東京と奈良がそれぞれどのような役割を果たして全体の事業を進めているのか、評価に当たる東京・奈良の委員に全体像が見えるようにしてほしい、17年度には両研究所からのヒアリングを希望したい、といった意見があった。
3. 広報も含めて、研究成果や資料・データベースの公開の重要性については、多くの外部評価委員が強調しているところである。また国際的な情報発信についても良い評価をいただいているが、今後ともわが国の中心となって積極的に行うよう要望された。
4. 次期中期計画を視野に入れた意見としては、以下のようなものがある。

① 評価方法・基準

定量・定性などの評価の仕方・基準については、独法化当初からの課題でもあり、全体としての統一をとるために今年度はできるだけ「評価の観点・基準」にあげた6つの観点をを用いるようにしたが、事業によってはもう少しスタッフの取り組みや努力の過程が反映されるような基準設定が工夫されて良いのではないかという意見があった。

② 事業内容と人員・予算の関係

研究・事業の内容や実施状況について高い評価を受けている項目が多いが、逆に現在の人員で行っていることに限界を超えてがんばっているのではないか、今後の経常的な予算削減や研究者の異動・退職が事業内容の縮小につながらないようにしてほしい、といった意見が出された。

③突発的な事項に対する対応

キトラ・高松塚古墳、海外支援など緊急に対応しなければならない重要事項が生じたときに、たとえ年度途中であっても通常のプロジェクトを見直して、優先順位を立て直すような柔軟な対応が必要であろうとの意見があった。

④連携大学院

大学院教育は研究所にとって負担になっていることは理解できるが、可能な範囲で今後とも推進してほしいという意見が東京、奈良両方の委員からあった。

⑤東京文化財研究所についての指摘

これまでの研究の蓄積をもとに、他の機関においては構想し得ない、文献データと画像データをリンクした総合的な文化財アーカイブの実現に向けて、努力してほしいとの意見が出された。

⑥奈良文化財研究所についての指摘

これまでも指摘されていることであるが、本省の直営事業となった国有地の維持管理、整備事業について、より早い時期に調査研究事業と一体として運営していけるよう、研究所は関係機関と共に努力してほしいとの意見があった。

【今後の検討課題】

1. キトラ古墳・高松塚古墳の調査保存、西アジアへの保存修復協力事業や情報関係事業など、東京と奈良が一体となって進めている事業の評価については、評価に当たる委員に全体の姿が見えるよう、次回から工夫していきたい。
2. 研究成果の評価のあり方については、定性評価の観点にしている「適時性」「独創性」などの用語が適切かどうか、またA、B、C・・・の評価は中期計画・年度計画に掲げられた数値を基準にして評価しているが、それでよいのかなど、外部委員から毎回、様々な意見が寄せられている。所内からの意見もふまえ、次期中期計画を策定する中で改めてより適切なものに修正していきたい。
3. 事業内容や組織については、上に掲げた意見だけでなくこれまでも多くの意見が寄せられた。現在、来年4月からの次期中期計画の始まりにあわせて組織の見直しを行っているところであり、その中で意見や提案を適切に生かしていきたい。

(2)業務運営の効率化に関する事項

【概要】

本事業に関わる評価対象件数は研究所で1件である。

国において実施される行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、予算に対し1%以上の効率化を達成することを目標としているが、平成16年度運営費交付金額が中期計画よりも約13%の減少という要因がある上で、様々な管理、業務面でのコスト削減の努力した結果、1.63%の効率化(特殊要因を除く)を達成することができた。

なお、具体的な対策として、国際業務の効率化、共通的業務の効率化、省エネルギー、施設の有効利用、システムの構築、外部委託・事務のOA化の推進、自己点検評価の実施を年度計画に掲げたが、いずれも実施しているところである。

外部評価委員による評価結果は、事業責任者による自己評価を下回るものではなく、定性的評価の「独創性」(「B」)以外はいずれも「A」並びに「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 省エネを進めていくことは、業務の効率化と同時に環境を守る活動へとつながっていく。今後の継続を望む。
- ・ 年々厳しくなる条件の中で、今年度も目標値を達成出来たことは大いに評価できると思う。節減できなかった部分については、次年度への課題として検討いただきたい。
- ・ 民間の目から見ると、なお非効率な点が認められる。

(3) 調査・研究に関する事項

【概要】

本事項に関わるプロジェクト研究などの評価対象件数は、研究所全体で67件である。

このうち、東京文化財研究所が分担するプロジェクト研究は、「東アジア地域における美術交流の研究①日本における外来美術の受容に関する調査・研究」「伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究」「画像形成技術の開発に関する研究」「非破壊調査法に関する調査研究」「周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究」「文化財保存に関する国際情報の収集及び研究(ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例)」などの38件である。外部評価委員の評価が自己評価を下回る事項はなく、いずれも、「定性的評価」「定量的評価」「実績の総合的評価」に関して「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」に関して「順調」と評価された。

また、奈良文化財研究所に関わるものは29件である。その内容は、平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡およびその関連遺跡とその出土遺物・遺構に関する調査研究8件、文化財建造物、書跡資料および古代庭園に関する調査研究7件、埋蔵文化財の発掘調査およびそれに関連する作業の手法・技術の開発・改良に関する研究3件、科学的手法を用いた新たな保存修復技術・方法の開発に関する調査研究2件、文化財の活用手法に関する調査研究3件、文化財の調査研究および保存科学に関する国際交流・協力と国内各種研究機関などとの共同研究6件である。外部委員による評価結果は、ほとんどの研究が定性的・定量的観点の各項目において事業責任者による自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、「A」並びに「順調」と評価された。また自己評価を上回る評定が1件(年輪年代測定法の開発研究)あった。

【外部評価委員の意見】

- ・ (日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究は) データ数において称賛すべき成果を挙げているのみならず、データ構成に対する取り組み自体が利便性の点においても、正確さの点においても高く評価出来ることを特記したい。
- ・ 伝統芸能の持つさまざまな側面を解明したこれらの成果は、今後の継承・後継者の育成におおいに役立つものと確信します。
- ・ 卓越した撮影技術による研究画像形成が重要作例に対して継続され、印刷技術へも配慮した報告書が刊行されたことは、社会への大きな寄与として高く評価できる。この画像は、文化財研究のためには不可欠なものとして位置づけられるため、本事業を遅滞なく継続するための全所的な支援体制の確立が望まれるといえよう。
- ・ 無機材質はもとより、有機材質の非破壊的調査に力をいれており、文化財を構成する素材をひろい視野からとらえている。将来的には、たとえば有機材質に関して調査の指針となる基本的データを集めたアトラス的なものを作成していただきたい。
- ・ 周辺環境の変化が著しい屋外文化財の保存について、正確な調査・研究と修復処理実験が行われたことを高く評価する。

- ・ 中国陝西省の唐代陵墓石彫の保存修復のために、これも多角的な協力を展開すべく周到に準備を進めている。特に注目されるのは、現地受入れ側の自立的な運営を行っている点で、当センターのこれまでの成果の大きさを物語っているといえよう。
- ・ 平城宮、飛鳥・藤原宮域において着実に継続される発掘調査により、新知見が多く得られた。平城宮中央区朝堂院での称徳天皇大嘗宮の確定や東院地区での宮内最大級の総柱建物の発見などは大きな成果である。また興福寺大乘院庭園における12世紀前半の禪定院園池の確認や石神遺跡北辺部の様相の解明も成果として評価できる。
- ・ 木造建造物保存修復の一次資料である写真・図面の目録および現状変更説明資料の刊行とデータベース化は、極めて価値が高い。続刊の順調な出版が望まれる。
- ・ 古代庭園に関する調査研究は、研究会およびデータベースの公開などに成果を挙げたといえる。
- ・ 南都七大寺の書跡資料等に関する調査研究は、着実に基礎作業が進められている。
- ・ 官衙遺跡関係の発掘調査資料・図面などのデータベース化は高く評価できる。早い時期の公開が望まれる。
- ・ 動物考古学分野における調査・研究の枠組みづくりは、本研究所ならではの重要な事業であり、今後とも順調に進展することを期待する。
- ・ 年輪年代学における歴史学・美術史・建築史への影響・寄与は非常に大きい。マイクロフォーカスX線CT装置の開発は高く評価できる。
- ・ 遺物の分析に用いるマルチレーザーラマン分光分析装置の軽量・小型化を実現し、効果的に実用している点をとくに評価したい。
- ・ 中国・韓国との共同による古代都城・生産遺跡等の調査研究は、難事業ながら着実に成果を挙げている。
- ・ いくつかの業務にみえる人員不足への対応の必要性や研究の継続性については考慮されたい。

(4) 調査・研究の成果の公表に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で31件である。

このうち、東京文化財研究所が分担する事項は、各種定期刊行物、報告書、公開学術講座、ホームページ及びデータベースの作成管理、作品の展示公開、研究会などの23件である。外部評価委員の評価が自己評価を下回ったのは「芸能部夏期学術講座」のみで、定性的評価の効率性の観点と定量的評価の参加者数の観点で、自己評価の「A」を「B」と判定された。設定した基準値をクリアしているが、もっと参加者を増やし、研究成果をさらに社会に還元するようという励ましをいただいたと受け止めたい。また、評価は自己評価を下回らなかったが、「各研究プロジェクトにおけるアンケート調査等の実施」について、昨年度に引き続き、アンケートの回収率が極端に低いものがあると指摘された。アンケートの手法について、早急に検討しなければならない。その他の事項については、いずれも、「定性的評価」「定量的評価」「実績の総合的評価」に関して「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」に関して「順調」と評価された。

また、奈良文化財研究所に関わるものは、「研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行」「公開講演会、現地説明会等の実施」「飛鳥資料館、平城宮跡資料館などにおける展示の充実」や研究集会など8件である。外部委員による評価結果は、定性的評価の1項目(正確性)において事業責任者による自己評価を下回るものが1件(研究成果の公表に関するアンケート調査の実施)あり、自己評価「A」を「B」と評価されたが、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。しかし定量的評価観点の飛鳥資料館・平城宮跡資料館の入館者数は自己評価・外部評価ともに「C」・「B」であっ

た。展示内容の充実や国際シンポジウムの開催などの努力には一定の評価を得たが、今後さらに努力を重ねたい。

【外部評価委員の意見】

- ・ とくに「雑誌目録」は明治・大正期の雑誌については他の追随を許さぬほどのコレクションであるため、刊行が待たれていたものである。早期に web 公開をして、日本における有数の美術雑誌データベースとして運用してほしい。
- ・ ユネスコから傑作と宣言された人形浄瑠璃を日本国内と世界へ(どのように)発信していくか。大変重要な役割が文化財研究所にはある。今回の企画は演出面に着目している点、語りの変化と音声資料を取り上げる等意欲的で評価は高い。参加者数が少ないのは勿体ない。
- ・ 黒田作品の展示というだけでなく、「デジタル画像体験」の展示は、本研究所ならではのもののであるが、黒田作品に限らず、保存科学など、美術品の科学的な調査・研究成果の展示等にもあの場所を活用できないか。
- ・ アンケートの回収率が極端に低いものがある。参加者にとっては自分が満足したことをアンケートに書くのは面倒な人もいる。満足度を知りたいならアンケートの方法を考えるべき。
- ・ 成果刊行を積極的・意欲的に行っていることは評価できる。『平城宮跡発掘調査報告書 XVI』『平城京漆紙文書(一)』『埋蔵文化財ニュース』No.116 英語版などは貴重な成果と考える。今後も海外に向けさらなる発信を期待する。
- ・ 文化財情報のデータベース構築に対する長年の取り組みとリーダーシップに敬意を表する。
- ・ 絹染色文化財や瓦などの研究集会は、大変有意義で高く評価できる。
- ・ 充実した内容にも関わらず飛鳥資料館・平城宮跡資料館の入館者数が目標値に達しなかったのは惜まれる。今後は、生涯学習と結びつけた講座や体験型の展示などを行い、幅広い世代の参加を図ってほしい。研究所の研究発信の場としてもっと有効に活用することを考えるべきである。

(5)文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で9件である。

このうち、東京文化財研究所が担当する事項は、「資料閲覧室運営」「伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化」「文化財保存に関する国際情報の収集及び研究 ―データベースの作成・公開―」「システム管理」などの7件である。外部評価委員の評価が自己評価を下回る事項はなかったが、「システム管理」に関しては、その定性的評価の正確性の観点において、自己評価も外部評価委員の評価も「B」であった。委員からは「ネットワークへの専門知識を有する職員が不在のためとはいえ改善されることが望ましい」との意見をいただいております。解決すべき課題である。その他の事項については、いずれも、「定性的評価」「定量的評価」「実績の総合的評価」に関して「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」に関して「順調」と評価された。

また、奈良文化財研究所に関わるものは、「文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供」「情報システム基盤の整備及びホームページの充実」の2件である。外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 定性的な「質」の問題を維持してゆくためには、定量的な問題をどう克服してゆくかが課題となる。とくに質の高い情報提供サービスが広く知られていけばいくほど、寄贈資料数や閲

覧者は増加していく。少ない職員数ではそのデータ作成業務と閲覧サービス両方に十分には対応できないと思われる。来年度以降は将来的な閲覧サービスはどうあるべきかを具体的に検討する必要がある。

- ・ 進展する技術革新への対応は、データの精度を確保するためには必須であるため、今後同様の方針で継続してゆくことが望ましい。
- ・ 図書資料室の閲覧スペースを拡大するなどの努力がなされているが、利用者がなお少なく、PRにもっと努められたい。
- ・ ホームページはリニューアルにより大変利用しやすくなっている。さらに充実を望む。

(6)文化財に関する研修等に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で6件である。

このうち、東京文化財研究所が担当する事項は、「博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」などの3件である。外部評価委員の評価が自己評価を下回る事項はなく、いずれの事項も、「定性的評価」「定量的評価」「実績の総合的評価」に関して「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」に関して「順調」と評価された。

また、奈良文化財研究所に関わるものは、「埋蔵文化財発掘技術者研修の実施」「京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進」「博物館実習生の受入れ」の3件である。外部委員による評価結果は、「博物館学実習生の受け入れ」事業の定量的評価で「C」の自己評価に対して「A」と評定された。これは「実習生数の多寡は申請者側の問題である」との意見であったが、研究所としての目標がある以上、目標達成のため今後さらに努力を重ねたい。「埋蔵文化財発掘技術者研修の実施」事業の定量的評価の1項(受講者数)は自己評価・外部評定ともに「B」であったが、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 東京でおこなう総合的な研修に平行して、地方へも出向いての研修をおこなっており、相互に補完している。東京での研修では、2004年末の臭化メチル全廃ということから害虫管理に力点を置いており、毎年同じことをするのではなく、編成がよく考えられている。
- ・ 今後相手側(大学)の構想展開に呼応し可能な範囲内で継続することを望む。
- ・ 奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの組織の充実が必要である。
- ・ 連携大学院教育は、他の大学院にない独自の専門領域を活かした教育であり、社会的貢献度も高い。所員の負担は大きいですが、大学院教育との連携をさらに深めてほしい。

(7)国、地方公共団体等への援助・助言に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で11件である。

このうち、東京文化財研究所が担当する事項は、「文化財の材質に関する調査と援助・助言」「無形文化財の保存・伝承・活用等に関する調査・助言」などの4件である。外部評価委員の評価が自己評価を下回る事項はなく、いずれの事項も、「定性的評価」「定量的評価」「実績の総合的評価」に関して「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」に関して「順調」と評価された。

また、奈良文化財研究所に関わるものは、「文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原事業に関する技術的助言」「キトラ古墳及び高松塚古墳壁画の調査及び保存・活用に関する技術的助言」「地方公共団体等が行う平城京域や飛鳥・藤原京域発掘調査への援助・助言」「文化庁が実施する国際交流展示事業に関する援助・助言」など7件である。外部委員による

評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 文化財の調査、保存、修復、整備、活用に関する援助や助言は、そのための人材や設備が不足がちな地方公共団体にとって非常に有益であり、地道な活動であるが、継続しているところに意義がある。
- ・ キトラ古墳や高松塚古墳の調査と壁画保存は、先端技術を駆使して良い成果があがっている。
- ・ 小規模ながら、川原寺の鐘楼(経楼)確認等に成果を挙げている。
- ・ ドイツにおける日本考古展は、海外で高い評価を得ただけでなく、国内でも展示された意義は大きい。

(8)その他附帯業務に関する事項

【概要】

本事業に関わる評価対象件数は、奈良文化財研究所の6件である。

その内容は、「平城宮跡等公開活用支援事業の実施」「平城宮跡解説ボランティア事業の運営」「ミュージアムショップの運営委託」などである。外部委員による評価結果は、外部評価委員の評価が自己評価を下回る事項はなく、いずれも、「定性的評価」「定量的評価」「実績の総合的評価」に関して「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」に関して「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 発掘作業との折り合いをつけながら各種事業を進めていくなど、平城宮跡の公開・活用事業への協力は十分行われていると思われる。ひきつづき文化庁平城宮跡管理事務所と緊密な連携のもと、業務を遂行されたい。
- ・ 他府県のボランティアたちも平城宮跡のボランティア事業の充実ぶりに目を見張っている。ひきつづきボランティア諸氏との美しい協同を願う。
- ・ 新しい図録の出版、また平城宮跡資料館での飛鳥資料館の図録・グッズ販売など、新たな広がりを見せてくれているのは喜ばしい。ただ、飛鳥資料館ではスペースが狭いため並べられている図録が見にくい状況がある。ひと工夫を望みたい。
- ・ アンケートの回収率を上げるには、内容の吟味とともにアンケートの書きやすさを作ることも大切であろう。書く場所は今のままでいいのか、書くことによって何かメリットはあるのかなども御一考願いたい。